

聖書：ルツ記 1：1～22

説教題：大麦の刈り入れの

日 時：2015年4月12日

今日から開くルツ記は、1章1節に「さばきつかさが治めていたころ」とありますように、これまで見て来た士師記と同時代の書です。ここを見る時に私たちは慰められます。士師記はイスラエルの暗黒時代でした。人々は自分の目に正しいと見えることばかりを行ない、霊的にも道徳的にも一層墮落していくという下降線をたどる歴史でした。しかしその時代には一点の光もなかったわけではなかった！ご存知のように、ルツ記は旧約聖書の中でも最も美しい物語の一つとして人々に親しまれています。その物語が、何と今まで見て来た士師記と同時代の出来事であった。私たちはここに、たとえ暗黒時代でも、このルツ記の登場人物たちのように生きることは可能なのだと知るので。どんな逆境、困難の中でも主に従うことは可能であり、そうして主の祝福にあずかった人たちが一方ではいたことを知って大いなる励ましをいただくのです。

さて、この第1章の中心人物は姑のナオミです。まず注目したいのは、彼女を襲った不幸についてです。彼女は夫エリメレクとの間に二人の息子マフロンとキルヨンを授かりました。後に彼女が「私は満ち足りて出て行きましたが」と語っていますように、彼女にとって、夫を持ち、子供も与えられて4人で生活することは大いなる祝福でした。しかしさばきつかさの時代に飢饉が起り、彼らはパンを求めて他の地に避難します。ベツレヘムは「パンの家」という意味ですが、パンの家さえ食べ物が取れない異常事態に見舞われます。そこで彼らはモアブの地へ出て行きます。そこでナオミは夫を失います。生き延びることができるようにと外国へ出て行ったのに、そこで一家の大黒柱が死んでしまう。予想だにしない悲劇的展開です。一体何のために私たちはここまで来たのでしょうか！と叫びたくなるような状況です。

こういう時、やもめは当然ですが、自分の子供たちの将来へと望みをつなぎます。夫は失いましたが、子供たちが何とか成人して立派にやって行ってくれば、親として大きな慰めが得られます。モアブの地で、二人の息子たちはオルパとルツという女性を妻に迎えました。大きな悲しみを経験した家族にとって、共に歩む人たちが増えたこと、また新しい子孫がこれから生まれて来るだろうと予期することは、悲しみを癒してくれる喜ばしい出来事だったでしょう。ところが5節から分かることは、この結婚後にマフロンとキルヨンが死んでしまったということ。しかも子供を授からないうちに。

なぜこんな悲しみばかりが彼女の家には連続したのでしょうか。ある人はまず飢饉が起こったのは、さばきつかさの時代の暗黒イスラエルへの主のさばきだと言います。そしてエリメレクの死については、約束の地にとどまらず、外国へ出て行った不信仰へのさばきだと言います。またマフロンとキルヨンが死んだのも、外国人の女と結婚したからだと言

います。なるほど、こうするとある意味ではすべてがすっきり説明されます。しかし私たちが注意すべきは、今日の箇所はそれをこの章のメッセージとして語ってはいないということです。ある時、生まれながら目の見えない人を見たイエス様の弟子たちが「この人がこのように生まれついたのは、誰が罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」と質問した時、イエス様は、そのどちらでもないと答えられました。私たちが往々にして何かがあると、「そうなった原因は何か」「どこに問題があったか」「誰が悪いか」と犯人探しをする。そのような見方は、現在苦しみにある人たちを益々苦しみに追いやる結果となるでしょう。イエス様はそのような見方を退けられました。ですから私たちも自分の好奇心によって、書かれていること以上を推測することには慎重であるべきでしょう。むしろ著者がここで強調していることはナオミが置かれた状況の厳しさです。愛する伴侶を失うだけでも非常な喪失なのに、次いでふたりの息子が死に、彼女は一人取り残されてしまった。この状況を良く見て欲しいと著者は思っている。

ナオミは後にベツレヘムに帰って来ます。その時、19 節にありますように、町中が騒ぎ出し、女たちは「まあ。ナオミではありませんか。」と言います。これは彼女が以前とは変わり果てた姿になっていたことを暗示しているでしょう。ベツレヘムの女たちはナオミと再会できて、もちろん嬉しい。しかし 10 年あまりの労苦と悲劇を経験して、かつての友達でさえも、「まあ。ナオミではありませんか。」と驚きを表現せざるを得ないような容姿に彼女はなっていた。一体モアブへの旅は何の良いことを彼女にもたらしたのでしょうか。出て行く時は満ち足りていたのに、帰りは素手で帰って来た。「私をナオミ（快い）とは呼ばないで、マラ（苦しみ）と呼んで下さい。」とお願いしなければならないような、一切のものを剥ぎとられた、この先の望みのない者として彼女は帰って来たのです。

次に見たいことは、このような困難と悲劇の中でナオミはどのように生きたかという点です。彼女は主がご自分の民を顧みてパンを下さったと聞いてユダに向かって出発します。最初は二人の嫁も一緒に出発しましたが、途中で思い直して、それぞれ自分の母の家に帰るように言います。それは二人の嫁たちの幸せを思ってでしょう。まだ若い二人には再婚のチャンスがある。こんな年老いた私、将来の望みのない姑に付いてイスラエルまで来ても、彼女たちには何の益もない。それよりは自分の国に帰り、ふさわしい人を見つけて、新しい生活をした方が彼女たちのためだ。別れるのはさみしいが、それが彼女たちにとってベストである。そう考えた末の決断です。その姑の優しい心が良く分かるので、オルパとルツは声を上げて泣いたのでしょう。

そんなナオミの言葉の中に、私たちは彼女の信仰者としての姿を垣間見ることができません。彼女は 8 節 9 節で「主があなたがたに恵みを賜わり、あなたがたが、それぞれ夫の家で平和な暮らしができるように主がしてくださいますように。」と言いました。すなわち主こそすべての祝福の源であり、主が彼女たちを祝福して下さるようにと祈りました。こ

れと結び付けて考えるべきは、一見これと対立するように見える 13 節後半の言葉です。ナオミはそこで「娘たち。それはいけません。私をひどく苦しませるだけです。主の御手が私に下ったのですから。」と語っています。簡単に言えば彼女はここで、主は私に敵対しておられると語っています。これまでの飢饉や夫との死別、子どもたちの死、また子孫が与えられなかったこと等は、みな主によるものであり、主が私に下された災いの始まりにしか過ぎない。このような私に付いて来たら、あなたがたはもっと不幸になる。だからついて来るな！と語っています。彼女は二人の嫁たちを思って心を鬼にしてそう語っているわけです。そしてこれ以上、強烈なアピールの仕方はないでしょう。しかし私たちはこの言葉を見て、彼女が神に対して苦々しい心を持っていたとか、不信仰になっていたと考えるべきではないと思います。なぜなら彼女は 8 節 9 節で、主のいつくしみを信じて、その御手に嫁たちを委ねているからです。これらの言葉はセットで考えなければなりません。

言葉を補えばこういうことでしょう。まず彼女から学ぶことは、彼女は自分に正直に生きているということです。彼女は自分に起きた数々の災いを偶然や事の成り行きには帰していません。すべての上にあります主権者を見つめ、その方からこれら一切が生じたと見ています。しかしだからと言って心配はいらない、目の前の悲劇はたいしたことではないという振りはしない。13 節最後の「主の御手が私に下ったのですから。」という言葉は、二人の嫁を追い返すための強烈な言葉であると同時に、深い心の痛みを覚えているナオミの中から搾り出されて来た言葉です。20 節 21 節はさらにそうでしょう。「私をナオミとは呼ばないで、マラと呼んで下さい」と彼女は語っています。「全能者が私をひどい苦しみに会わせたのですから」と。彼女は今もなおナオミ「快い」と呼ばれることが耐えられなかった。かつてから見れば変わり果てた今の自分が、この状況で「快い」などと呼ばれることは心の中をかきむしられるようなことであった。彼女はつらかったのです。苦しかったのです。悲しかったのです。そのことを彼女は隠していません。私は神を信じているから大丈夫と言って、顔で笑って心で泣くというような演技をしていない。苦しいなら苦しいでいいのです。悲しいなら悲しいでいい。つらいならつらいでいい。それを否定する必要は何もないのです。

しかしそれと共に彼女から学ぶことは、だからと言って彼女は主への信仰を投げ捨てていないということです。人間の感覚から言えば、どうして自分に災いをもたらす神を信じ続けられるだろうかと思います。そんな神なら捨てたら良いと思います。ところがナオミはそうしなかった。それは彼女が自分を賢いとはせず、主にすべての解決を委ねているからでしょう。なぜ自分が今、こんなにも厳しい状況に置かれているのか、彼女には十分には理解していない。しかしだからと言っていきり立たない。なぜ神は説明しないのかと言って自暴自棄にならない。いや、そのようなエネルギーも残っていなかったのかもしれませんが。しかしなお彼女は心の深いところで主にお任せし、主こそ主権を持つておられるこ

とを告白し続けた。もし彼女の心が主への疑いや不信感で一杯だったら、二人の嫁のために、「主が慈しんで下さるように」とは祈れなかったでしょう。むしろこの主への信仰によって、二人の嫁に対する先の優しい気遣いや愛の決断も出てきたのではないのでしょうか。

このようなナオミであってこそ、16節17節のルツの告白があったと考えられます。しばしばルツ記は嫁姑問題の理想とされます。ルツがナオミに「あなたの行かれる所に私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。」と言ってどこまでも付いて行ったように、クリスチャンの嫁もそのように振る舞うべし、と言われたりします。しかし考慮すべきは、姑は嫁に自分の母のところに帰りなさいと勧めたことです。二人とも自分のことよりも相手のことを考えていました。相手にこうして欲しいと要求している人は誰もいません。互いに相手の益を思って意見を戦わせている。誰かに要求するのではなく、その点こそ、見習うべきではないのでしょうか。

しかし今申し上げたいことは、先に見たナオミの信仰者としての姿を見て、ルツは16節17節の信仰告白へと至ったのではないかということです。モアブ出身のルツにとっては、まことの神信仰へと導かれる方法は他にありません。ルツは姑の姿をずっと見て来たのです。悲しみに次ぐ悲しみの中で姑はどのように生きて来たのかということ。もし姑がいつもブツクサブツクサ不満ばかり口から出して生活していたらどうでしょうか。また彼女がいつも自分に苦しみを与えた神を非難しているだけだったらどうでしょうか。そうだとしたら一体誰がそんな姑に付いて行きたいと思うでしょうか。またそういう姑が悪口を言っている神を信じたいと思うでしょうか。つまり事実はそうでなかったのです。ルツはナオミを見てきました。その人生の悲しみの中で、悲しみを率直に表現しつつも、それでも神を信じ続けて、今もなおこのように優しい言葉をかけてくれる姑を。彼女はそのような姑について行きたいと思ったし、彼女がそのように信じている神、いや彼女をこのように支えているまことの神を信じて行きたいと思った。そうではないのでしょうか。

実に素晴らしいことは、ナオミは逆境の中でこのように主を証したということです。私たちは「あかし」と言うと、何か良いことがないとダメだと思いがちです。成功したこと、うまく行ったこと、皆に賞賛されるようなことがないと良い証にはならない、と。しかしそうではない例がここにあります。ナオミの信仰は悲しみの中で輝きました。苦しみの中で、決して無理をしたわけではなく、神を真実に見上げて生きたその歩みが、嫁のルツにまことの神を指し示した。そう考えると、確かに周りの人々は、私たちが困難の中でどのように歩んでいるかを良く見ているのではないのでしょうか。普通なら落胆し、意気消沈し、自暴自棄になりそうな中で、私たちが神によって生きるなら、人々はそこに何か見るので、す。ですからもし私たちが今、様々な困難に取り囲まれているなら、それも一つの機会です。晴天の日ばかりでなく、土砂降りの雨の日や、嵐の中でも、私たちは神の栄光を現わすことができるのです。

最後に短く注目したいのは、今日の章最後に見られる神の導きです。22節：「こうして、ナオミは、嫁のモアブの女ルツといっしょに、モアブの野から帰って来て、大麦の刈り入れの始まったころ、ベツレヘムに着いた。」ナオミを迎えたパンの家・ベツレヘムはこの時どうだったでしょうか。「大麦の刈り入れの始まったころ」でした。これはルツ記一章の最後にあって、小さな光を与えてくれているものです。彼女は飢饉のためにモアブへと出て行き、大変な苦しみを味わいました。そして今まさに素手で帰って来たものの、その彼女を待っていたのは、刈り入れるばかりに実っていた麦畑でした。すべてが暗いまるルツ記1章は終わっていません。何も良いことがないまま閉じられてはいません。ここに彼女が信じた全能者なる神の導きの御手が現われ始めています。ナオミはまだこれがこの先、どんな大きな意味を持っているかは知りません。しかし神様は働いて下さっていたのです。またナオミはルツと一緒に帰って来ました。「素手で帰って来た」と彼女は言いましたが、そこにはこれから大きな働きをするこの書の主人公ルツがいます。この「モアブ人ルツ」と「黄金に実った畑」で、どんな神の導きの御手が現れるか、ナオミはまだ知らない。しかし主はすべてを備えておられたのです。私たちは悲しみばかりをこの章で見してきましたが、この一章だけではルツ記は判断できない。人生は終わりを待ってみなければ分からないのです。そこにどんな神の摂理があるのか、今すべてを私たちは言い当てられないというのを学ばされるのです。

ですから私たちも様々な苦しみや悩みを経験しても、だからと言って神を投げ捨てるべきではないのです。今その意味が分からなくても、主こそ主権を持たもうお方であることを仰いで、主に従い、導きを待てば良い。私たちは主の御手と守りを様々な事柄に見出せるかもしれません。大麦の刈り入れに主の御手が現れ始めていたように、質素な食卓にご飯一杯が与えられていることに主の支えの御手は見出せるかもしれない。あるいはルツはモアブ人でしたが、そのように人の目からは評価されないかもしれない誰かが、私と共にいてくれることに主の祝福は始まっているかもしれません。そうとらえると、そこここに私たちは主が将来に向けて備えて下さっている導きの御手を見ることができるとはなんでしょうか。大切なことはナオミのように主こそ全能者であり主権者であることをどこまでも見つめていることです。順境の時ばかりでなく、逆境の時もそのことを信じ続ける。この状況も主の御手の中にある！これを真に握っていて下さり、益を取り出して下さることができるのは主であられる！と。その方を仰いで、私たちも希望を投げ捨てず、目の前の状況をもう一度主にお委ねして歩みたいのです。そうする者を主はどのように導いて下さるのか、続くルツ記を読むことを通して、さらに主への信頼を増し加えられ、私たちの思うところをはるかに越えて良いご計画を成し遂げて下さる主の摂理の導きの中を進んでまいりたいと思います。